

ワリン・ワリンから みるフィリピン

岡部正義

「ワリン・ワリン」。これは、タガログ語で、「蘭」を意味する *awaling* を連続させた単語で、英語に直訳すれば *orchid orchid*、つまり「蘭蘭」である。「蘭」を強調させたこのひとつの固有名詞は、バンダ・サンデリアナ (*Vanda sanderiana*) という正式学名をもつ蘭の一種 (写真1) を指している。このワリン・ワリンが近い将来、フィリピンの新しい国花に制定される動きが出ている。

現在のフィリピン国花はサンパギータ (*Samapaguita*) という花で、ジャスミンの一種である。サンパギータは、直径三センチほどで純白の清楚で可憐な花を咲かせる。マニラの町中を歩いていると、この摘み花を両手に垂らした売り子が歩いているのを見かける。タクシーに乗ればミラーのふちに、教会に行けば祭壇や入り口にサンパギータがつましく飾られている。サンパギータはアメリカ統治下にあった一九三四年に、フランク・マーフィー総督によってフィリピン国花に宣言された。それ以来、八〇年近くのあいだこの国を象徴してきた。

他方、ワリン・ワリンの美しさは趣が異なっている。直径が十センチほどあり、ピンク色と茶色のツートンの派手な色彩で、芳香を放つ派手な花を咲かせる。その観賞価値の高さから、蘭交配の親としても珍重され、園芸業界では欠かせない貴重な原種である。そして、何よりフィリピンではワリン・ワリンをして「フィリピンの花の女王」 (*Queen of Philippine flowers*) と称せられてお

り、文字どおりフィリピンが誇る花なのである。また、ルマドと呼ばれるミンダナオ島の先住民族により、フィリピン神話に出てくる森の妖精として崇拜されているともいう。

二〇〇九年、私は大学院でフィリピンの開発経済学を専攻しており、マニラ首都圏や東ピサヤ地方の都市・農村貧困地域の予備的調査をする機会を持った。スラム街や郊外の農村であっても、家の軒先には蘭が咲いていたのには目を見張った。もちろん、私のようにアジアの国々に蘭の花を結びつけて歩いていなければ、そんなことには気付かないかもしれない。しかし、景色に溶け込んだ蘭の花をみたとき、人びとにとつて蘭が身近な存在であることを感じた。しかし、ワリン・ワリンはそう簡単に見られなかった。スラム街滞在の合間を縫って、ケソン・シティで蘭業を経営する農園にも訪問した。そこでみつけたワリン・ワリンは現地価格で六〇〇〇〜一万ペソで販売されてい



[写真1] ワリン・ワリンの花 (ケソン・シティにて) <筆者撮影>



[写真2] フィリピン特産の胡蝶蘭原種 <筆者撮影>

た。一ペソは大雑把にいうと約二円ほどである。失業率も高く、職種によって収入に大きな差のあるフィリピンにおいて平均収入を語ることはあまり意味がないかもしれないが、都市部の比較的安定した職種に就いている人びとの月給でさえだいたい日本円で一万円弱から高く二万円ほどである。外国人向けに高値で売っているのかもしれないことをさつ引いたとしても、いかにワリン・ワリンが高価で取り引きされているかがお分かりいただけると思う。

二〇一二年三月、このワリン・ワリンを (サンパギータに加えて) 新国花に制定すべきという法案が下院の審議を通過した。なぜ、新国花にワリン・ワリンが追加されるようになっているのか? もちろん、国家のシンボルの決定には、一部のインテリ層の志向が反映されるに過ぎないという側面もある。しかしそこには、ワリン・ワリンがフィリピン固有の花であること、そして近年少しずつ経済復興が進みつつあるフィリピンの発展への志向とワリン・ワリンの美しさと生態が持つイメージが重なることを見いだすこともできよう。

ワリン・ワリンは、フィリピン南部のミンダナオ島にのみ分布する蘭である (したがって、ルソ



〔写真3〕 フィリピン人園芸家が発見したフィリピン固有のパンダ原種(筆者撮影)

ン島の蘭業者ですら、ダバオやサンボアンなどのデューラーに供給を依存している。他方、サンパギータはヒマラヤを含むインド亜大陸からインドネシアまで広範に見られる。ワリン・ワリンは、「女王」と讃えられるだけあって、まさにフィリピンを象徴する花として認められるだろう。

また、その生態も一般の種子植物とは異なっている。着生と呼ばれる生態にあり、主にフタバガキという樹木の頂に太い根をはりめぐらし、植物体を支える。そして、森林に差し込む太陽光をめぐらしてグングンと成長し、大輪のピンク色の花を咲かせる。その様子からしばしば寄生植物と誤解されがちだが、樹木から養分を受け取っておらず、自活している。そのような上昇的で自立的な生態と、成長の暁には美しい花を咲かせる姿は、これからの国家・経済の発展を期待するフィリピンの若き世代の人びとの大志を体現しているのかもしれない。

法案の作成にはダバオ市第二区のカルシオ・アルバーノ議員、パンガシナン州第六区のマールン・プリミシヤス・アガバス議員が関与した。アルバーノ氏は、国花制定によってさらなる経済成長の機会が拓かれることを期待している。ワリン・ワリンは一九八二年にイギリス園芸界に紹介され、

爾来、タイ、シンガポール、マレーシア、ハワイなど世界各所で栽培・輸出されてきた。鉢花産業・切り花産業として数十億ドル規模に成長してきており、新国花にワリン・ワリンが制定されれば、フィリピンの経済成長への大きな機会となりうる(1)。

ワリン・ワリンは園芸的価値が高く、マーケットでの人気もある。そのため、乱獲も進み、稀少な植物となってきた。さらに、ミンダナオ島へも開発の波が押し寄せ、フタバガキ林が伐採されて自生地が失われることにも拍車がかかっている。このようななか、環境省を中心にワリン・ワリンの保護と増殖に努める必要性も提起されている。加えて、ワリン・ワリンを媒介項に、植物公園や展示会などによって人びとの往来が活発化し、文化交流も期待できる。園芸業のみならず、こうした環境保護産業や観光業にも経済効果が伝播していくことも望まれる。

今後の行方だが、サンパギータもワリン・ワリンも、互いに独特の魅力を持っており、一国二国花として双方とも国花となるかもしれない。例えば、インドネシアでも国花は三つあり、複数の国花があることは珍しくない。

国花には、その国の最大公約数的な特徴や国家のイメージが象徴されている。もしも国花として新たにワリン・ワリンを加えられたならば、サンパギータのときとは異なり、まさにフィリピン人によって、フィリピンならではの花を国花に選ばれたことになる。

蘭の花には、他の植物にはない独特の富裕や発展の象徴性がある。日本でも各種のお祝い事の際には、蘭の花が好んで贈答用として贈られる。ワリン・ワリンという「蘭の女王」が国花に選ばれば、フィリピンのイメージもより明るく、華やかになるかもしれない。

フィリピンでは、最近数は減りつつあるもの

の、マニラ近郊の蘭展示会やダバオ市近郊の植物公園でワリン・ワリンを見ることが出来る。フィリピンにはワリン・ワリンを含め、いくつもの固有種の蘭が自生している(例えば写真2・4)。フィリピンを訪れた際には、ワリン・ワリンを取り巻く事情を知ったうえで、これらの蘭をぜひ探し求め、その花をご覧いただければ、美しさもひとしおだと思う。そして、その背景に貧困や失業から少しでも抜け出し、発展を願う人びとの願いがみえ隠れしていることも想起されたい。

《注》

- (1) <http://www.congress.gov.ph/press/details.php?pressid=5967> (閲覧日：二〇一二年八月五日)



〔写真4〕 ミンダナオ島固有のフィリピンナゴランの原種(筆者撮影)